鍛冶屋の馬

庄野潤三

冶屋の馬

庄野潤三

文藝春秋

鍛冶屋の馬

昭和五十一年四月十五日　第一刷
昭和五十一年七月十日　第二刷

著者　庄野潤三
発行者　樫原雅春
発行所　株式会社　文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町三
電話(〇三)二六五一一二一一
振替口座　東京七八七四三番

印刷所　精興社
製本所　大口製本

万一、落丁乱丁の場合は
お取替致します

© Junzo Shono 1976　Printed in Japan

目

次

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

鍛冶屋の馬　七
七草過ぎ　三三
ユッカ蘭の猫　五五
花瓶　八三
草餅　一〇九
ココアと筍　一三五
梅の実　一六一
雲の切れ目　一八九
シャボン玉吹き　二一七
納豆御飯　二四五
真夜中の出発　二七一
あとがき

装幀　木下義謙

鍛冶屋の馬

鍛冶屋の馬

「子供たちが四輪車に乗って遊んでいたの。お昼になるちょっと前。それで和子、道路へ出たら危いからといおうと思って、出て行ったら、向うから鍛冶屋さんが坂をおりて来て、いま、うちはだあれもいねえんだといったの」

そこまで話してから、和子は、

「あ、その前の日に」

といい直した。

「夕方、外で大勢集まっていたの、うしろの田圃を埋め立てたあとへ。いまでもまだトラックが土を運んでいるんだけど。もうそろそろ子供を呼んで、家へ入れないといけないから、

出て行ったの。そうしたら、鍛冶屋の小父さんが馬に草を食べさせようとして、連れて来たの」

隣りの部屋では、明るい電燈の下で正夫と竹夫が、おもちゃのトラックの上に、妻から貰った餡パンと煎餅の入った袋を載せて遊んでいる。

時間が遅いので、この餡パンと煎餅は家まで持って帰ることになっている。

和子が黍坂からバスに乗って、駅まで出かけたら、思いがけず、花屋の前で井村の妻と会った。それで、ちょっとだけ家へ寄ることにしたのだが、子供の手を引いて崖の道を上って来た時には、あたりは黄昏の気配に包まれかけていた。

「広っぱの端の方に草が生えているの。小父さん、小さい頃から乗っていたんですかと聞いたら、そうだよといって、ちょうどそばに大家さんのうちの春男ちゃんがいたの。春坊のころからさんざん乗っかって、走りまわっていたって」

「春男ちゃんは何年になった」

「三年生、かな。気がやさしいから、いつもちっちゃい子と遊んでいるの。お小遣を貰うでしょう。それで箱に入った駄菓子を買って、みんなが、春男ちゃーん、ちょうだーいといって寄って来ると、分けてやるの」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「末っ子だろう」
「そう。四人兄弟の末っ子なの。去年の秋だったけど、大家さんの小母さんが、もうすぐ運動会だから、行ってみたらいいよと和子にいったことがあるの、卵を買いに行った時に。春男ちゃん、元気だから、運動会でもよく走るんでしょうといったら、あの子は駄目なんだよ、足が遅くて駄目なんだよというの。それに時々、熱を出して寝るし、男の子はあのくらいになれば熱なんか出さないものなのに。春男は弱くて、本当にどうしたんだろうねえというの」
「そんなに弱くないんだろう」
「ちっとも弱くないの。たまに風邪はひくけど。学校から帰ったら、ぼーんと縁側へランドセルを放り出して、そのまま自転車に乗って飛びまわっているの。小母さんが心配そうにいうのがおかしいくらい、元気な子なの」
そこで和子は、いまはそんな寄り道をしている時ではないといったふうに、
「春坊のころからさんざん乗っかってたんだといったの。最初にこの馬を見せてくれた時――あれは三月ごろね、昔、このあたりのお祭りにはよく競馬をやって、鍛冶屋さんも自分のうちに三頭ばかり馬がいて、それを方々へ出したと話していたから、聞いてみたの。どん

な競馬ですかといって。そうしたら、はた競馬というの。はじめは訳が分らなかったの。畑のまわりを走らせるから、そういうのかと思ったの」

聞いている井村の方で先ず畑の景色を頭に浮かべたくらいだから、和子がそう考えるのも無理はなかった。

「草競馬っていうでしょう」

「ああ、フォスターの曲にある。いい曲だな」

すると、時々、子供の方に声をかけながら、台所の支度にかかっていた妻が、その節を口吟んでみせた。

「和子、あれのもうひとつ低いのが、畑競馬というのかと思って、畑のはたですかと聞こうとしたら、優勝したら旗が貰えるんだ、おいら、いっぱい貰ったというの」

「旗なの」

と妻がいった。

井村もそういうのは初耳であった。

「けさもテレビで放送していただろう。みなかったけ？　岩手の方の旗競馬をやってた。おいら、必ず朝のテレビ、みるんだ。毎朝、みてるんだっていうの」

「何だろう」

「うちへ帰って新聞をみたら、農村向けのそういう番組があるのね。その時、もっと話してくれそうだったのに、前の新しく建った借家へ畳屋さんだとか建具屋さんが来ていて、やあ、親父さん、馬飼ってんのかといったの。それからそっちの人と話を始めたの」

道路に沿って三軒、借家が建っている。和子たちはその真中の家にいるのだが、庭先に葡萄棚があった。

それは大家さんのうちのものであったが、これを取り払って、新しく三軒、借家を建てることになった。その話が決まった時には、井村と妻はがっかりした。

二人がこの借家へ入った最初のころ、夜になると蛙の声が聞えて来たうしろの田圃を（それも大家さんのものだが）埋め立てることになった時も、残念がって、

「あのままにしておいてくれたらいいのに」

と悔んだ。

井村の住んでいるあたりはすっかり町になってしまったので、ちょうど田植の時期に妻と二人で黍坂まで出かけるようなことがあると、田植のころには、道ばたに立ち止って、きれいに並んだ苗の列を眺めたものであった。

今度は、もっと身近に迫って来た。
三軒あった借家が、いっぺんに倍の六軒になるのだから（それもあの趣のあった葡萄棚を無くしてしまって）、よほどせせこましくなる。だが、そういってみたところで、どうにもならない。
むしろ、この大家さんだからこそ、これまで四年間もゆったりとまわりを贅沢に使って、暮して来られたのだと感謝しなくてはいけないだろう。
そう思って諦めるよりほかない。
「畳屋さんも建具屋さんもこの附近じゃなくて、少し離れたところから来ているの。でも、鍛冶屋さんは顔が広いので、みんな、知っているのね」
和子は感心したようにいってから、
「その次の日にまた、小父さんと会ったの」
この人はまだそんな年ではないのだが、長男に全部、仕事を任せてしまって、悠々と暮している。長男のお嫁さんというのは、まだ二十過ぎくらいの人だが、和子のうちの下の子と同じ年の女の子がいる。
鍛冶屋さんはいつもその子の手を引いて、近所を歩いている。野良仕事に持って行く背負

い籠の中に、孫を入れて歩いていることもある。屋号を書いた小型トラックの、運転席に孫を乗せて走っていることもある。

「うちにはだあれもいねえんだといって、ああ、そうだった、かあちゃんが腹いてえといって寝てんだ。そういったから、じゃあ、小父さんがお昼御飯をつくって、ひとりで食べるんですかといったの」

そうすると、長男のお嫁さんは子供を連れて、どこかへ出ていたのだろうか。

「そうしたら、小父さん、おいら料理だったら、この界隈で一番なんだぜ、誰にも負けないんだぜというの。魚なんか一ぴき買ってきて、刺身でも叩きでも何でもやっちまうんだ」

「器用なのね」

台所から妻がいった。

「そうなの」

和子はうしろを振り向いて、いった。

「この間も鯖買って来て、全部おいらがしめ鯖にしたんだぜ。そうしたら日もちがするから。煮物だったら、いちばんうまい。誰にも負けない。蒟蒻でも、法事の時にはこういう切りかた、おでんの時はこういう切り方と分けてやるんだ」

「大したものね」
と妻がいった。
「和子もびっくりして、どこで習ったんですかと聞いたの。そうしたら、若い時分、いや、昔といったのかな、鍛冶屋さんの、いま倉庫とか納屋になっているあたりを指して、あそこのところに豚をいっぱい飼っていたから、餌にする残飯を貰いに二子玉川の仕出し屋まで行っていたんだ。仕出し屋の台所でおいら見ていたから、全部覚えたんだって」
「門前の小僧、というけれど」
と井村はいった。
「鍛冶屋の息子が、仕出し屋の台所で料理を覚えたというのは、ちょっと珍しいな」
「そうですね」
妻が相槌を打った。
「それから、小父さんはそこの店はいまも盛んにしていて、どこの百貨店に入っているとか、どこの食堂に弁当を出しているといったの。よく覚えていないんだけど。それで、いまの奥さんというのは」
そういってから、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com